(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第14集

芥見町屋遺跡

－芥見野村水源地建設事業に伴う緊急発掘調査－

2005

岐阜市上下水道事業部
岐阜市教育委員会
(財)岐阜市教育文化振興事業団

理

例　言

1．本書は、岐阜市祇園１丁目66番に所在する芥見町屋遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、芥見野村水源地建設事業に伴う緊急発掘調査として、岐阜市上下水道事業部、岐阜市教育委員会、財団法人岐阜市教育文化振興事業団の三者による協定に基づき、委託者・岐阜市上下水道事業部の経費負担により、受託者・岐阜市教育委員会と財団法人岐阜市教育文化振興事業団が発掘調査を行った。

3．調査期間は下記の通りである。

　発掘作業　平成16年９月27日～平成16年10月６日

　整理作業　平成17年８月１日～平成17年10月31日

4．調査組織は下記の通りである

　調査主体者　　岐阜市教育委員会教育長　安藤征治

　　岐阜市教育委員会社会教育室長　後藤敏朗

　　（財）岐阜市教育文化振興事業団理事長　多田喜代則

　　（財）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所長　西村覺良

　調査担当者　　岐阜市教育委員会社会教育室文化財グループ　内堀信雄

　　（財）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所　井川祥子

　　（財）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所　山口早苗

　調査補助員　　倉持和美

5．本書の作成は、内堀の指導と協力のもと、井川が行った。

6．執筆分担は、第２章第１節は内堀、それ以外は井川である。

7．出土遺物については下記の各氏にご教示頂いた。

　須恵器　　渡辺博人（各務原市文化創造部木曽川学研究所）

　山茶碗　　藤澤良祐（愛知学院大学教授）

8．調査記録及び出土遺物は（財）岐阜市教育文化振興事業団が管理している。

凡　例

1．図中の方位は真北を示す。

2．原則として、遺構図版は1／50、遺物図版は1／3の縮尺である。

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と歴史的環境

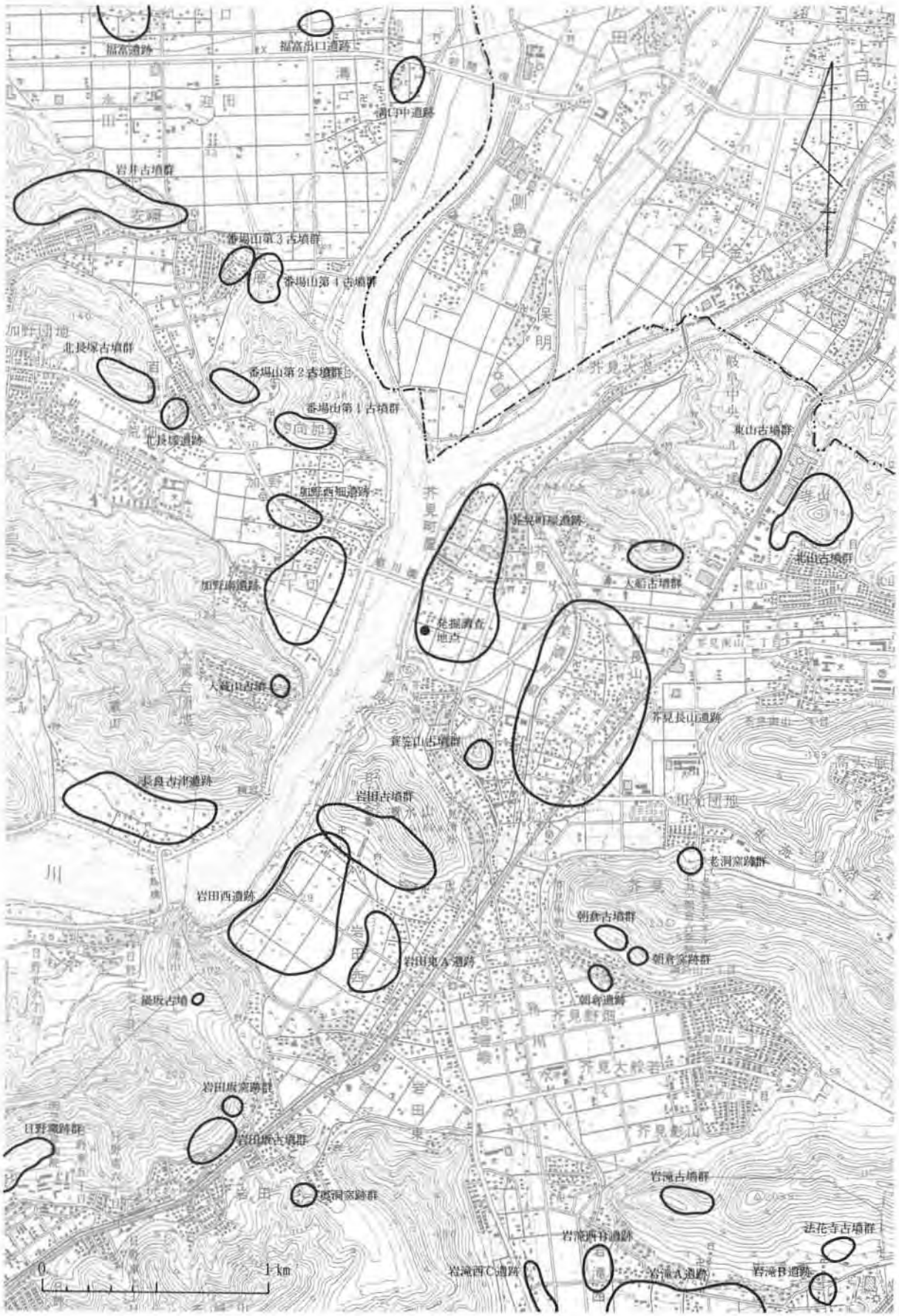
岐阜市は濃尾平野の最北端に位置し、芥見町屋遺跡は岐阜市の北東部、長良川と武儀川、津保川が合流するやや下流左岸の河岸段丘下の自然堤防上から後背湿地にかけて立地する。古代においては、各務郡の芥見郷の比定地内に位置し、長良川の対岸は、山県郡片野郷、約１㎞下流の対岸は方県郡である。芥見郷推定範囲内には、「美濃国」「美濃」の刻印須恵器が出土したことで知られる老洞・朝倉須恵器窯跡群もある。この窯は、須恵器の一大産地である美濃須衛古窯跡群の一部であり、その西端に位置する。また、東山道も芥見郷内を通っていたと推測されている。推定ルートは、芥見町屋遺跡の南にある清水山の南で、対岸の古津地区で長良川を渡り、岩田地区を通り、南東部の岩滝地区、そして各務原へと進んだと考えられる。

芥見町屋地区は、近世には芥見の渡しがあり、長良川右岸とを結ぶ東西の道があり、国道156号線開通以前、長良川左岸を南北に結ぶ道も集落内を通るという交通の要衝であった。そして長良川を利用した舟運の拠点としても栄えた。

芥見町屋遺跡における発掘調査は、過去に１回行われ（今回の発掘調査地の東約250m地点）、弥生時代の遺構（竪穴住居跡が５基ほか）や遺物が見つかっている。

第２節　周辺の遺跡

芥見町屋遺跡が位置する芥見地区とその周辺では、縄文時代から戦国時代にかけての遺跡が多数確認されている。縄文時代は、芥見盆地の西端に位置する北長塚遺跡で、団地の造成工事に伴い縄文土器や石鏃・打製石斧等が出土した。また、朝倉遺跡でも団地造成の際に縄文土器や石器が採取されている。古墳時代から古代にかけては、横穴式石室を内部主体に持つ群集墳が多く立地する。芥見町屋遺跡の北西部に大船古墳群、東山古墳群、北山古墳群の３つの古墳群がある。大船古墳群は大船山の南東に出た小支丘の南側斜面に位置し、２基の円墳が知られている。２号墳からは須恵器の杯身や高杯など出土している。北山古墳群は北山の山頂と山麓に立地する３基の古墳が知られている。平成11年度に山頂の３号墳の発掘調査が行われ、耳環や須恵器が出土した。南部には蓑笠山古墳群、岩田古墳群、岩田坂古墳群、朝倉古墳群がある。蓑笠山古墳群は２基の円墳からなり、１号墳からは須恵器が出土している。岩田坂古墳群は７基の円墳からなる。須恵器が出土している。朝倉古墳群は、諏訪山の南麓に位置する４基の円墳からなる。大正時代の発掘調査では金環・直刀・須恵器・鉄片・管玉が出土している。昭和42年の団地造成工事で消滅した。長良川右岸には、岩井古墳群、番場山古墳群、北長塚古墳群、大蔵山古墳がある。岩井古墳群は７基の円墳からなり、須恵器、直刀、勾玉、管玉が出土している。番場山古墳群は、番場山の山麓に立地する４つの支群（１～４古墳群）からなる。第３支群は団地造成のため消滅した。内部主体はいずれも河原石を使用した横穴式石室で、金環・直刀・鉄族・須恵器・土師器・刀子・鉄が出土している。平成15年度に岐阜県文化財保護センターにより第１支群の七反田番場山古墳が発掘調査された。北長塚古墳群は12基の円墳からなるが、昭和39年の団地造成工事の際に消滅した。須恵器や勾玉、管玉、小玉、直刀などが出土している。大蔵山古墳は大正14年に発掘調査された。円墳で、内部には長持形石棺があり、須恵器の無台杯が出土した。集落遺跡としては、芥見町屋遺跡の南東の河岸段丘上に立地する芥見長山遺跡がある。過去の発掘調査で奈良時代の竪穴住居跡などが見つかっている。岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡では古代から中世の遺物の散



第1図　周辺遺跡位置図（国土地理院発行1：25,000地形図（岐阜北部）使用）

布が見られる。長良川右岸立地する福富遺跡・福富出口遺跡、長塚遺跡、加野西畑遺跡、加野南遺跡では、古代から中世にかけての遺物の散布が見られる。東山道推定ルート上に立地する長良古津遺跡、岩田西遺跡、岩田東Ａ遺跡、岩滝Ａ遺跡でも古代から中世の遺物の散布が見られ、岩滝Ａ遺跡の試掘調査では古代の住居跡が見つかっている。当地域では窯跡も多く見られる。諏訪山の北斜面には老洞古窯跡が、南斜面には朝倉古窯跡が立地し、「美濃国」「美濃」刻印須恵器が出土した。いずれの窯跡も国史跡に指定されている。やや南にある岩田坂古窯跡群、奥洞古窯跡群、日野古窯跡群は、平安時代の灰釉陶器を焼成した窯である。中世・戦国時代は、芥見長山遺跡の発掘調査と試掘調査で、戦国時代の溝などが見つかっており、当遺跡の東1.5kmの尾根先端に立地する長山城跡に関係するものと考えられる。溝口中遺跡では、中世の遺物の散布が見られる。

〔参考文献〕　岐阜県『岐阜県史　通史編　原始』　1972
岐阜市『岐阜市史　史料編　考古・文化財』　1979
岐阜市教育委員会『長山遺跡発掘調査報告書』　1982
岐阜市教育委員会『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』　1996
（財）岐阜市教育文化振興事業団『北山３号墳』　1998
岐阜県教育委員会『岐阜県中世城館総合調査報告書　第二集』　2003

第２章　発掘調査の経緯・経過

第１節　発掘調査に至る経緯

平成16年7月上旬、岐阜市上下水道事業部から岐阜市教育委員会に、当該地において配管工事の計画があるとの連絡があり、文化財保護法上の手続きと試掘調査の必要性を説明した。7月16日付けで事業者から、文化財保護法第57条の3第1項の基づく発掘通知の提出と試掘調査の依頼があり、担当者が現地を確認したところ、遺跡内において一部無届の工事が行われていたことが判明した。岐阜市教育委員会では岐阜県教育委員会に発掘通知を進達するとともに、これまでの経過を報告し、今後の対応について指導を受けた。7月22日付けで、発掘通知に対して岐阜県教育委員会教育長から岐阜市上下水道事業部長あてに試掘調査を実施する旨の指示があった。この指示を受けて7月28日から30日まで岐阜市教育委員会の委託を受けた（財）岐阜市教育文化振興事業団が試掘調査を実施し、遺構・遺物の存在を確認した。7月22日付けで事業者から岐阜県教育委員会あてに、通知前に一部工事が行われた経緯についての顛末書が提出された。顛末書を受けて、8月9日付けで岐阜県教育委員会教育長から上下水道事業部長あてに今後こうしたことが再度おこらないよう、市教委と緊密な連絡を取るとともに、市教委の指導のもと、工事を実施するにあたって細心の注意を払うようにとの指導があった。同時に、岐阜市教委あてにも、こうしたことが再度起らないように留意するとともに、事業者に対して指導を徹底する旨の指示があった。その後岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会、事業者間で遺跡の保護のため、工法の変更等について協議を重ねた結果、遺跡に影響を与える範囲について記録保存のための本発掘調査を実施することになった。7月16日付けで岐阜市上下水道事業部長から提出された発掘通知に対して改めて、9月22日付けで岐阜県教育委員会教育長から事業者あてに発掘調査実施の指示が出された。これを受けて、9月24日付けで、事業者岐阜市上下水道事業部長と岐阜市教育委員会教育長及び（財）岐阜市教育文化振興事業団理事長の三者の間で現地調査及び整理報告等に関する協定書が締結された。協定を受けて、9月27日から10月6日までの間、岐阜市教育委員会及び（財）岐阜市教育文化振興事業団が現地の発掘調査を実施した。9月29日付けで、岐阜市教育委員会教育長から岐阜県教育委員

会教育長あてに文化財保護法第58条の2第1項の規定に基づく発掘調査の報告を行った。報告に対し、10月15日付けで、岐阜県教育委員会教育長から岐阜市教育委員会教育長あてに慎重に実施する旨の指示があった。

第２節　発掘調査の経過

発掘作業は、平成16年9月27日から10月6日にかけて建物建設に伴い地下に影響がある部分に調査区を設定して行った。調査区は、対象地の北西部に位置し、南北方向のトレンチ状の調査区を２つ設定（西区：1.2m×7.2m、東区1.2m×5.9m、面積15.7m²）して調査を行った。最初に試掘調査で確認した遺構検出面であるＤ層（Ⅲ層）上面まで重機掘削を行い、その後は人力作業に移り、遺構検出を行いつつ掘り下げを行った。途中、古代の須恵器や土師器等が出土した。10月6日までに地山まで掘削し、調査区平面図、土層図、遺物の取り上げを行い、発掘（現地）作業を終了した。

図面や出土遺物の整理作業は、平成17年8月1日～10月31日にかけて行った。出土遺物は、洗浄、注記、接合作業を行った後に実測をし、図版作成を行った。遺構図面は、合成等行い、図版を作成し、発掘調査報告書を作成した。平成17年10月31日にすべての調査行程が終了した。

第２図　発掘調査位置図

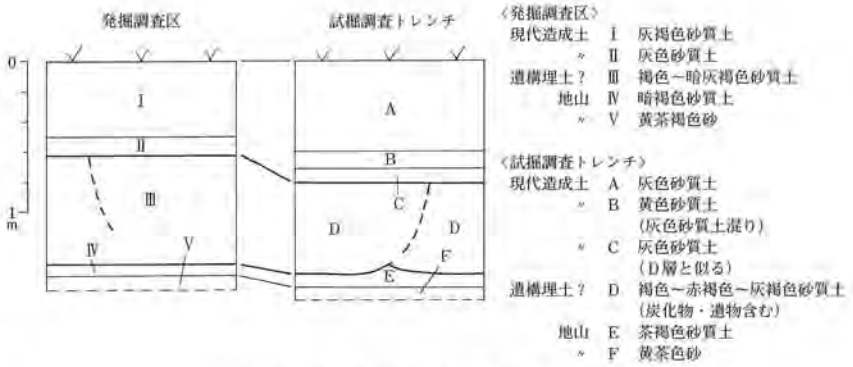
（この発掘調査位置図は、岐阜市の承認を得て、岐阜市作成地図（平成11年度測量）を複製したものである。平成17年10月12日　岐阜市第17号）

第３章　発掘調査の成果

第１節　基本層序（第３図）

発掘調査区の基本層序は、平成16年７月28日から30日にかけて行った試掘調査で確認されたものとほぼ同様の層位であった。試掘調査では対象地の中央東寄りに南北方向のトレンチとその中央で直行するように東西方向のトレンチを設定し、最深で現地表下約1.6mまで掘削を行った。その結果、Ａ～Ｆの６層を確認した。トレンチのいずれの地点においても同様の層位が確認された。このうちＤ層には遺物が多量に含まれるため、明瞭な遺構は検出されなかったが、遺物や炭化物が多く含まれること、遺物が集中して出土する箇所があることから、Ｄ層が遺物包含層ではなく、遺構である可能性が高いと考えられた。Ｄ層からは須恵器や奈良時代の土師器甕、灰釉陶器、山茶碗などの古代から中世の遺物が出土した。

発掘調査区ではⅠ～Ⅴの５層を確認した。Ⅰ層の灰褐色砂質土(厚さ約0.25m)、Ⅱ層の灰色砂質土（厚さ約0.15m）は現代造成土である。Ⅲ層は褐色～暗灰褐色砂質土（厚さ約0.7m）で、上部に多くの遺物が含まれるが、下部には含まれない。Ⅳ層の暗褐色砂質土（厚さ約0.05m）とⅤ層の黄茶褐色砂は地山である。試掘調査で確認した層位との対応関係は、土色など異なるものもあるが、Ⅰ層はＡ層、Ⅱ層はＣ層、Ⅲ層はＤ層、Ⅳ層はＥ層、Ⅴ層はＦ層にそれぞれ対応すると考えられる。試掘調査のＢ層は今回確認できなかった。



第３図　発掘調査土層柱状図

第２節　遺構・遺物の概要

（１）遺構（第４・５図）

発掘調査は、東区（東西1.2m×南北5.9m）、西区（東西1.2m×南北7.2m）の南北方向の調査区を平行して設定した。両調査区の間は約1.0mである。狭く長い調査区のため、平面的な遺構全体の把握は困難であった。

調査はⅢ層上面まで重機で土を除去し、そこからは遺構検出を行いながら掘り下げる作業を行った。Ⅲ層は場所によって微妙に土の色調や締まり具合が異なり、その上部には遺物が多く含まれ、集中して出土する箇所もあり、何らかの遺構が存在する可能性が高いと考えられるため、何度も平面精査や壁面精査をして遺構検出を行った。

Ⅲ層の掘り下げ途中には、西区の北側で南と北側とで土の違いがある箇所も存在したが、土層断面では確認することができなかった。また、西区の東壁中央部分で遺物が集中して出土したことから、土坑などの遺構である可能性が考えられたため、遺構検出を試みたが、結局地山まで掘り下げを行う間に、遺構と断定できるものを検出することはできなかった。

最終的に調査区の土層断面にて、西区の東壁のみで、幅4.5m、深さ約0.3～0.45mの遺構（12層）と

思われる掘り込みを検出した。この部分からは遺物が集中して出土したことからも、遺構である可能性が高いと考えられる。しかし、他の壁面で、これに対応する遺構を検出することはできなかった。但し、東区東壁面、西区東壁面の一部で、土質が異なる境を一部で検出しており、これらが対応するのであれば、東西調査区全体に広がる東西方向の溝か土坑である可能性も考えられる。結局、現地で確実に遺構と断定することはできなかった。

西区東壁中央部分（Ⅲ層）で、まとまって出土した遺物は、壁面内（第４図のトーン部分）約0.4mまで続いており、これらは調査最終日に採取した。大きな破片が重なるようにあることから一括廃棄されたものであるように見える。

遺物整理を行う課程で、調査区全体から出土したⅢ層上部の遺物には、接合関係があることがわかった。このことは、両調査区全体に広がる一つの大型の遺構が存在する可能性が高いことを表している。出土遺物からも８世紀前半と時期にまとまりがあることから、調査区壁面で一部検出された土坑か溝状のものが遺構である可能性が高くなった。

（２）遺物（第６・７図、第１～３表）

今回の調査で出土した遺物総数は941点（接合後）である。平面的には西区が72％、東区が28％と西区での出土数が多い。層位では、Ⅲ層が84％とその多くを占める。遺物の種類では、奈良時代の土師器甕が約54％、同時代の須恵器が22％である。

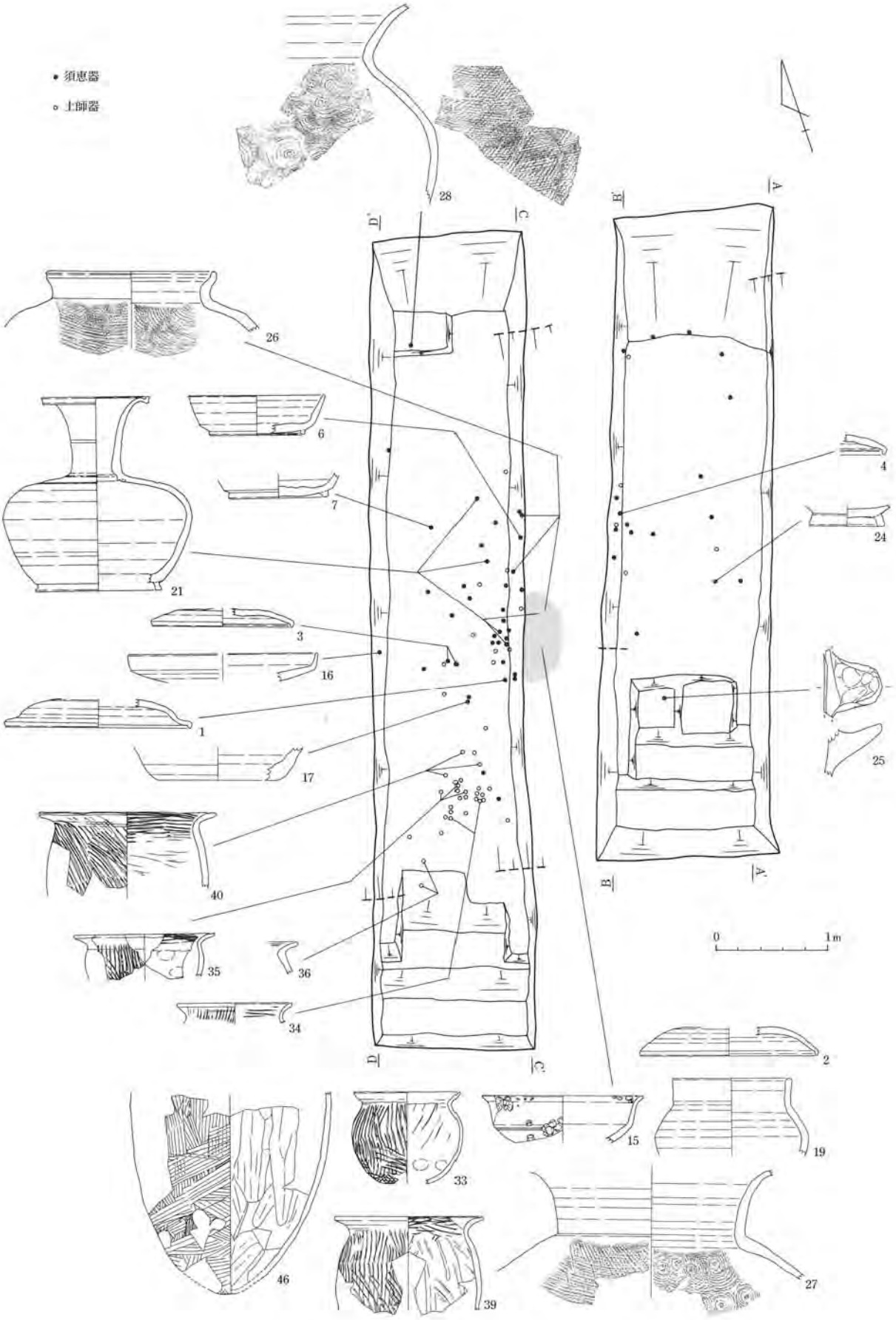
このうち64点について図化を行った。１～46はⅢ層上部（西区東壁面内出土遺物含む）より出土した。この層より出土した遺物は比較的大きな破片が多い。

1～28は８世紀前半の須恵器である。１～５は杯蓋で、３・４の口縁部には使用痕がみられる。6～12・14は有台杯で、６の高台裏にはヘラ記号がある。13は無台杯、15は椀で、外面に打ち欠いた痕跡が認められる。1・14・15は佐波理写しである。16は盤の口縁部、17～20は鉢で、このうち20は鉄鉢写しである。21～23は長頸瓶、24は瓶類の底部、24は甑の把手、26～28は甕である。胴部外面には平行叩き痕、内面には同心円当て具痕がみられる。26・27の内面は陶製当て具痕である。29～37は土師器である。29・30は古墳時代のもので、29は壺の底部で外底部に木葉痕がみられる。30は台付甕の脚部である。31は７～８世紀頃の焼塩土器。32は鍋か甑の把手。33～43・46は丸底甕である。この甕は、体部外面は縦・斜め方向のハケ目、内面は縦・斜め方向のケズリかナデ調整。口縁部内面は横方向のハケ目調整の後に横方向のナデを施す。外面は横方向のナデ調整を施す。７世紀後半から８世紀前半にかけての甕である。34・35の外面には煤が付着する。図化したもの以外の破片を含めてもこの２点のみ使用痕があり、他の甕には認められない。45は胎土に砂粒を多量に含む平底甕の口縁部と思われる。

47～57はⅡ・Ⅲ層より出土した。奈良時代から中世の遺物が見られる。47～49は須恵器。47は有台杯の蓋、48は有台杯、49は無台杯である。いずれも８世紀後半から９世紀初頭の須恵器である。50～53は灰釉陶器で、50～52は椀、53は段皿である。54～56は東濃型の山茶碗。57は土錘である。

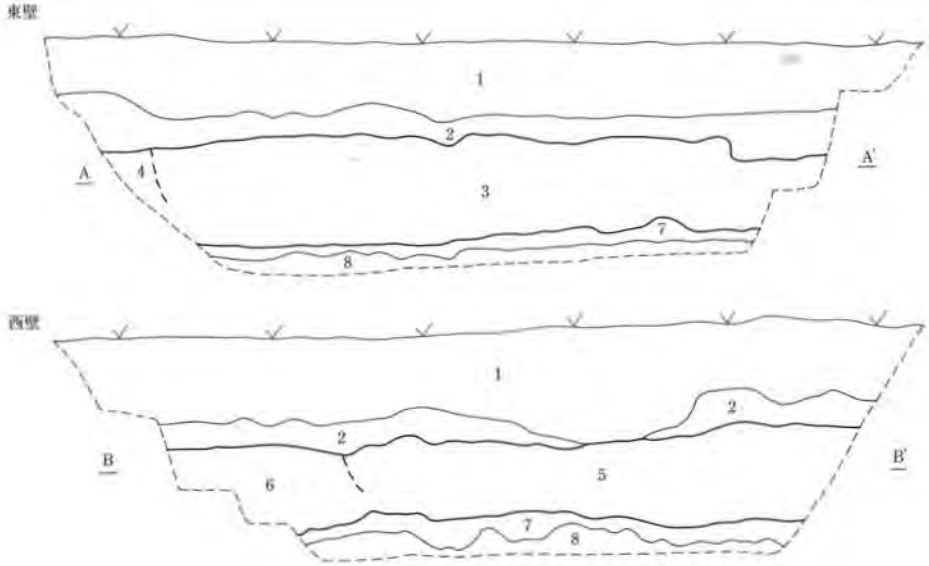
58～65はⅠ層や重機掘削中に出土した遺物である。58は灰釉陶器の椀と思われる。60は尾張型の山茶碗。59・61・62は東濃型の山茶碗。64・65は戦国時代の土師器皿の小形品である。

Ⅲ層出土の遺物は、須恵器は８世紀前葉と前半のものが大半を占める。その生産地は美濃須衛古窯跡群で、一部老洞窯跡群の製品と思われるものもある。土師器の丸底甕は７世紀から８世紀代に見られるものであるが、供伴する須恵器と同様の８世紀前半の年代が考えられる。また、須恵器は甕や瓶類などの貯蔵具が多く出土し、その口縁部や高台に使用痕はみられず、焼成段階で歪んだものが多い。これは須恵器そのものを製品として出荷したものではなく、何かの外容器として使用した可能性が考



第４図　発掘調査区平面図・遺物出土位置図

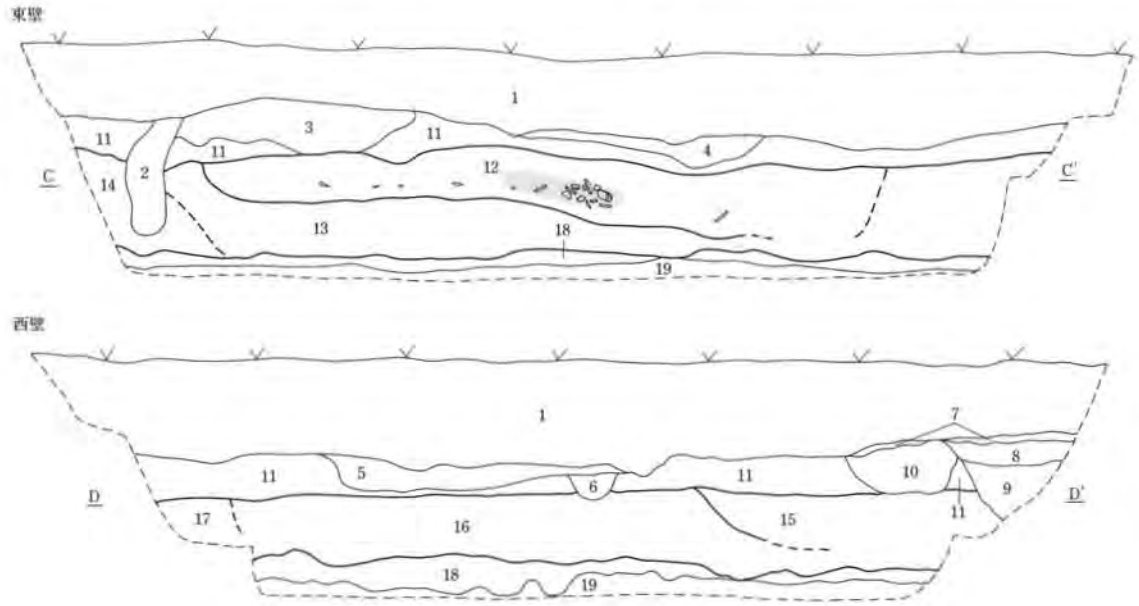
東トレンチ



Ⅰ層　1 灰褐色砂質土
Ⅱ層　2 黄褐色砂質土
Ⅲ層　3 暗灰褐色砂質土（締まり無し）
〃　4 暗灰褐色砂質土（締まる）
〃　5 暗灰褐色砂質土（遺物多く含む）
〃　6 暗灰褐色砂質土
Ⅳ層　7 暗灰褐色砂質土
Ⅴ層　8 灰茶褐色砂

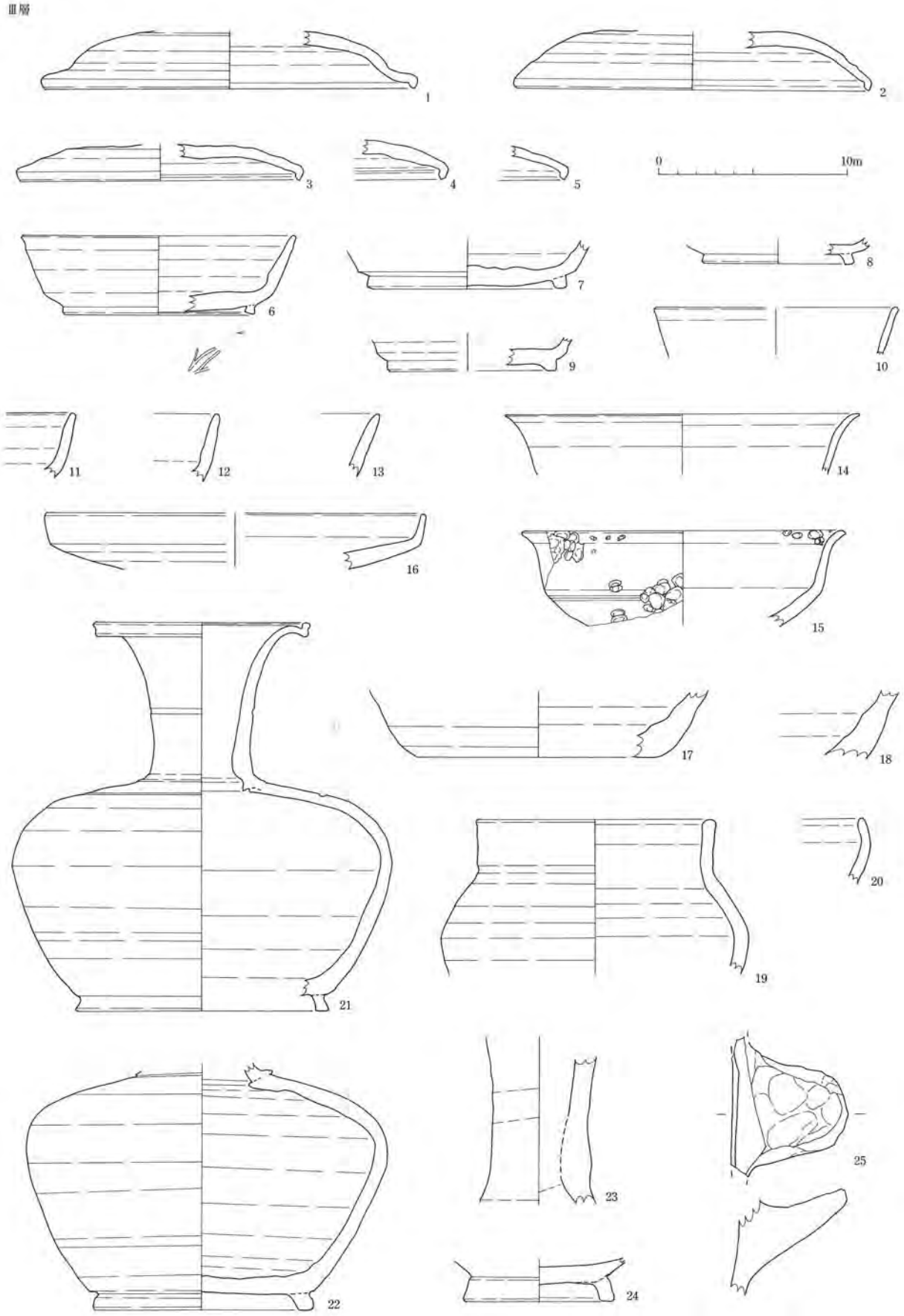
0　1m

西トレンチ

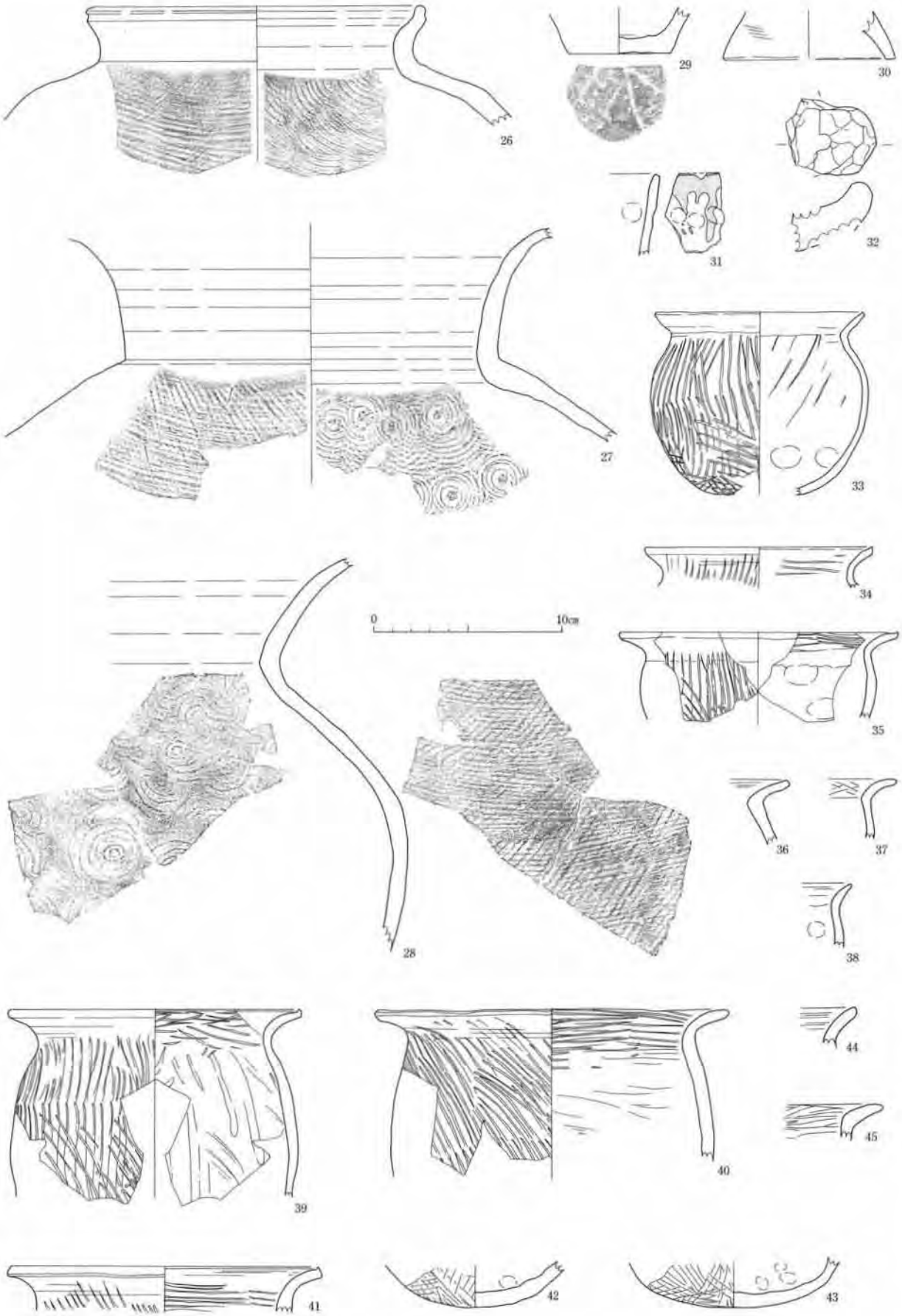


Ⅰ層　1 灰褐色砂質土
Ⅱ層　2 灰色砂質土
〃　3 灰褐色砂質土（締まる）
〃　4 灰色砂質土（締まる）
〃　5 灰色砂質土
〃　6 黄褐色砂質土
〃　7 暗灰褐色砂質土（硬く締まる）
〃　8 灰白色砂質土
〃　9 褐色砂質土
〃　10 暗褐色砂質土
〃　11 黄褐色砂質土
Ⅲ層　12 暗灰褐色砂質土（遺物多く含む）
〃　13 暗灰褐色砂質土
〃　14 褐色砂質土
〃　15 褐色砂質土（締まり無し）
〃　16 暗灰褐色砂質土
〃　17 暗灰褐色砂質土
Ⅳ層　18 暗褐色砂質土（締まり無し）
Ⅴ層　19 黄茶褐色砂

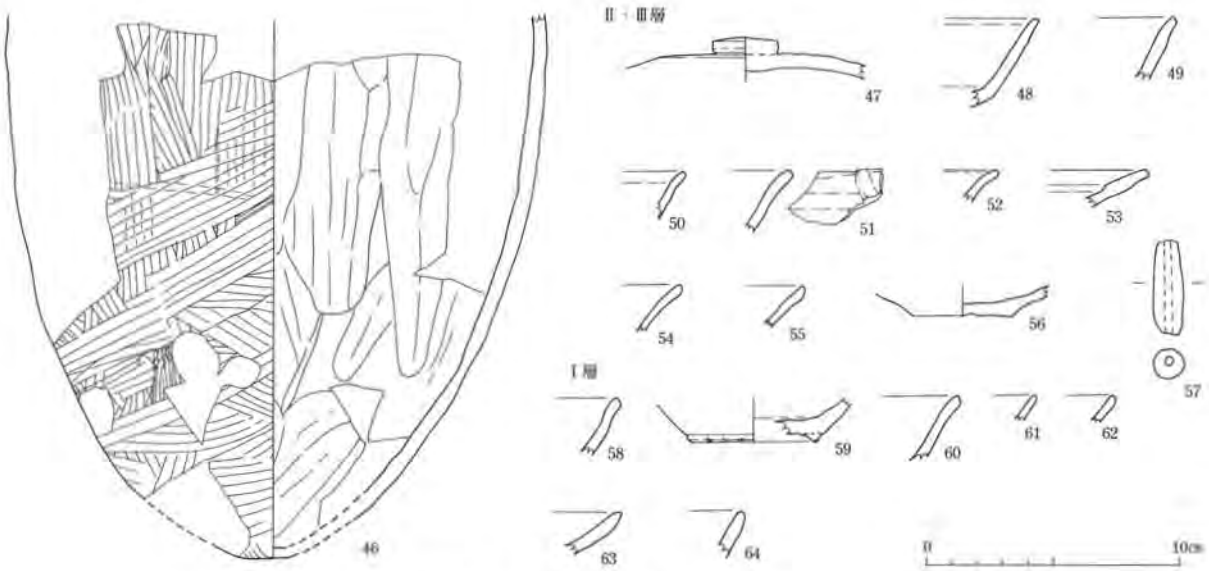
第5図　土層図



第６図　出土遺物実測図（1）



第７図　出土遺物実測図（2）



第８図　出土遺物実測図（3）

報告番号	整理番号	調査区	調査区・層位	種類	器種	分類・編年	産地	法量(cm) 口径	器高	底・台径	備考
1	11	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	蓋	8C代	美濃須衛	19.8	—	—	佐波理写し
2	7	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	杯蓋(有台杯)	8C前葉	美濃須衛	18.6	—	—	
3	9	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	杯蓋(有台杯)	8C前葉	美濃須衛	14.7	—	—	口縁端部に使用痕
4	24	東	Ⅲ層上部	須恵器	杯蓋(有台杯)	8C前半	美濃須衛	—	—	—	口縁端部に使用痕
5	25	西	Ⅲ層上部	須恵器	杯蓋(有台杯)	8C前半	美濃須衛	—	—	—	
6	14	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	有台杯	8C前葉	美濃須衛	14.6	4.2	10.0	高台裏にヘラ記号？
7	10	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	有台杯	8C前葉	美濃須衛	—	—	12.5	高台に使用痕
8	33	東	Ⅲ層上部	須恵器	有台杯	8C代	美濃須衛	—	—	8.1	
9	37	西	Ⅲ層上部	須恵器	有台杯？	—	美濃須衛	—	—	9.4	
10	36	西	Ⅲ層上部	須恵器	有台杯	—	美濃須衛	12.8	—	—	
11	31	西	Ⅲ層上部	須恵器	有台杯	8C前半	美濃須衛	—	—	—	
12	56	西	Ⅲ層上部	須恵器	有台杯	7C代	美濃須衛	—	—	—	
13	44	西	Ⅲ層上部	須恵器	無台杯	7C代	美濃須衛	—	—	—	
14	8	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	有台杯	8C代？	美濃須衛	18.9	—	—	佐波理写し
15	6	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	椀	8C前半	美濃須衛	17.2	—	—	佐波理写し、外面と口縁部内面に打ち欠いた痕
16	12	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	盤	8C前半	美濃須衛	22.0	—	—	
17	26	西	Ⅲ層上部	須恵器	鉢	8C前半	美濃須衛	—	—	—	
18	16	西	Ⅲ層上部	須恵器	鉢	8C前半	美濃須衛	—	—	—	
19	5	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	鉢	8C前半	美濃須衛	13.0	—	—	
20	66	東	Ⅲ層上部	須恵器	鉢	8C代	美濃須衛	—	—	—	鉄鉢写し
21	1	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	長頸瓶	8C前葉	美濃須衛	11.0	20.7	13.4	
22	2	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	長頸瓶	8C前葉	美濃須衛	—	—	11.1	
23	13	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	長頸瓶	8C前葉	美濃須衛	—	—	—	
24	23	東	Ⅲ層上部	須恵器	瓶	8C前半	美濃須衛	—	—	8.0	高台に使用痕
25	15	東	Ⅲ層上部	須恵器	甑の把手	8C前半	美濃須衛	—	—	—	
26	4	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	甕	8C前半	美濃須衛	—	—	—	内面陶製当て具痕
27	3	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	須恵器	甕	8C前半	美濃須衛	—	—	—	内面陶製当て具痕
28	61	西	Ⅲ層上部	須恵器	甕	7C前半	美濃須衛	—	—	—	外面平行叩き痕、内面陶製当て具痕
29	17	東西	Ⅲ層上部	土師器	壺？		—	—	—	5.4	底部に木葉痕
30	38	東	Ⅲ層上部	土師器	台付甕		—	—	—	—	
31	35	西	Ⅲ層上部	土師器	焼塩土器	7C代	在地	—	—	—	
32	27	西	Ⅲ層上部	土師器	(把手)	—	—	—	—	—	
33	21	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	土師器	丸底甕	A2類	在地	11.2	9.7	4.6	体部外面縦方向ハケ、内面斜め方向ケズリ
34	19	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	13.0	—	—	口縁部内外面スス付着
35	20	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	14.8	—	—	内面スス付着
36	63	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	—	—	—	
37	65	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	—	—	—	
38	72	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	—	—	—	
39	18	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	15.4	—	—	口縁部外面横方向ナデ、内面横方向ハケ。体部外面縦方向ハケ、内面斜め方向ナデ
40	29	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕？			18.8	—	—	口縁部外面横方向ナデ、内面横方向ハケ。体部外面縦方向ハケ、内面横方向ナデ

第１表　遺物観察表（1）

報告番号	整理番号	調査区	調査区・層位	種類	器種	分類・編年	産地	法量(cm)			備考
								口径	器高	底・台径	
41	22	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底壺	A2類	在地	16.4	—	—	
42	65	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	—	—	—	
43	64	東西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕	A2類	在地	—	—	—	
44	41	西	Ⅲ層上部	土師器	丸底甕？	—	在地？	—	—	—	
45	71	西	Ⅲ層上部	土師器	平底甕	B類	東濃	—	—	—	
46	73	西	Ⅲ層上部・遺物集中部	土師器	丸底甕	A2類	在地	—	—	—	体部外面縦ハケ、内面縦ケズリ
47	28	西	Ⅱ・Ⅲ層上部	須恵器	杯蓋(有台杯)	8C後半～9C初	美濃須衛	—	—	—	
48	34	西	Ⅱ・Ⅲ層上部	須恵器	有台杯	8C後半	美濃須衛	—	—	—	口縁部に使用痕
49	30	西	Ⅱ・Ⅲ層上部	須恵器	無台杯	8C後半～9C初	美濃須衛	—	—	—	
50	54	西	Ⅱ・Ⅲ層上部	灰釉陶器	椀	—	東濃	—	—	—	
51	58	西	Ⅱ・Ⅲ層上部	灰釉陶器	椀	—	—	—	—	—	
52	60	東	Ⅱ・Ⅲ層上部	灰釉陶器	椀？	—	—	—	—	—	
53	53	西	Ⅱ・Ⅲ層上部	灰釉陶器	段皿	—	—	—	—	—	
54	67	西	Ⅱ・Ⅲ層上部	山茶碗(東濃型)	碗	—	東濃	—	—	—	
55	68	東	Ⅱ・Ⅲ層上部	山茶碗(東濃型)	碗	—	東濃	—	—	—	
56	32	東	Ⅱ・Ⅲ層上部	山茶碗(東濃型)	碗	脇之島3	東濃	—	—	4.0	
57	59	東	Ⅱ・Ⅲ層上部	土製品	十錘	—	在地	—	—	—	幅1.2cm、孔径0.35cm
58	52	西	Ⅰ層	灰釉陶器？	椀？	—	—	—	—	—	
59	51	西	Ⅰ層	山茶碗(東濃型)	碗	明和1？	東濃	—	—	—	
60	46	東	Ⅰ層	山茶碗(尾張型)	碗	6型式	東濃	—	—	—	
61	48	西	Ⅰ層	山茶碗(東濃型)	小皿	—	東濃	—	—	—	
62	49	西	Ⅰ層	山茶碗(東濃型)	碗？	—	東濃	—	—	—	
63	43	西	Ⅰ層	土師器	皿(かわらけ)	C2類？	在地	—	—	—	
64	47	東	Ⅰ層	土師器	皿(かわらけ)	C2類？	在地	—	—	—	

第２表　遺物観察表（2）

調査区	層位	土師器(古代甕)	土師器(その他)	須恵器	灰釉陶器	山茶碗(尾張型)	山茶碗(東濃型)	その他	計
東調査区	Ⅲ層上部	138	40	38	2				218
	Ⅱ・Ⅲ層上部	2	1	1	1		2		7
	Ⅰ層・重機掘削	5	12	3	2	1	3	2	28
	排土		1						1
西調査区	Ⅲ層上部	321	78	141	5	2	8		555
	Ⅱ・Ⅲ層上部	3	4	3	3		1		14
	Ⅰ層・重機掘削	34	53	11	1		3	1	103
	排土	1	1						2
東西調査区	Ⅲ層	7		6					13
	計	511	190	203	14	3	17	3	941

第３表　遺物集計表

えられる。土師器甕も内外面に煤や焦げなどの使用痕の認められるものは極少量であり、何かを入れて運ぶための容器であったことも考えられる。しかし、これらの土器の内面には付着物はなく、痕跡を残さないものを入れ運搬していたと考えられる。

第4章　まとめ

今回の発掘調査は面積が小さく、データーが少ないこともあり、遺構の性格などを明らかにすることはできなかった。しかし、8世紀前半のまとまった遺物が出土し、それらの多くが認められない須恵器の甕や瓶類、土師器の甕であることから、内容物が残らない何かを入れて運ぶための容器として使用し、廃棄したと考えることができた。芥見町屋遺跡の立地状況から、長良川を利用した河川流通の集積場のような場所であったと考えられる。

また、7世紀後葉以降、美濃須衛古窯跡群で生産された須恵器は、主に、在地の中濃と、西濃、東濃の一部、尾張北部で使用されたことが解っている。中濃地域では特に長良川流域に分布し、このことは、須恵器を運搬する手段として長良川の舟運が利用されたことを表していると思われる。発掘調査では、未使用の須恵器が大量に出土することはなかったが、生活物資以外にも須恵器の流通にも関わっていたことも考えられる。

芥見町屋遺跡の南東部の河岸段丘上に位置する芥見長山遺跡でも7世紀後半～8世紀前半の遺構や遺物が見つかっており、芥見地区（旧各務郡芥見郷）の開発が進み、新たに集落が築かれたことが考えられる。7世紀後葉という時期は、美濃須衛古窯跡群で大量の須恵器が生産されるようになる頃でもあり、須恵器生産に携わった人が、岐阜市東部域に集落を営むようになったことが推測できる。

西濃・中濃地域では、6世紀末から8世紀前半にかけて丸底甕が使用された。調整技法や胎土などにより2類（A1・2類）に分けられる。A1類は三重県の北野遺跡とその周辺で生産されたものである可能性が高く、伊勢型甕と総称されている。この伊勢型甕は6世紀代から伊勢や尾張でも使用されており、美濃では西は各務原、北は関市までの地域で使用されている。伊勢や尾張では7世紀後半～8世紀代にも伊勢型甕が使用されつづけたが、中濃地域（岐阜市・各務原市・関市・美濃加茂市・美濃市・富加町）では7世紀後半頃からこの伊勢型甕とは胎土や調整が異なるA2類が使用されるようになる。これは伊勢型甕を在地で模倣したと考えられる甕で、今回の発掘調査で出土した丸底甕もA2類である。

岐阜市域では現在までに、集落遺跡では鷺山市場遺跡、城之内遺跡、芥見長山遺跡、古墳の副葬品としては上城田寺長屋1号墳、番場山古墳群で、周辺では関市の重竹遺跡でも大量に出土している。A2類の丸底甕は、使用地域が中農地域に限定されており、生産も同地域において行われたことが考えられる。8世紀後半なると東濃で生産されたと考えられる平底の濃尾型甕が使用されるようになり、丸底甕は姿を消す。今回の発掘調査では1点のみ平底甕の口縁部が出土している。

〔参考文献〕　内堀信雄・井川祥子「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996

内堀信雄「美濃の古代・中世の土器・陶器と水の道・陸の道」『歴史の山道と川の道シンポジウム－中山道と木曽川の今と昔－』各務原市埋蔵文化財調査センター　2002

渡辺博人「美濃の須恵器生産と古代寺院」『歴史の山道と川の道シンポジウム－中山道と木曽川の今と昔－』各務原市埋蔵文化財調査センター　2002

表土剥ぎ（北から）

作業風景（南から）

東区全景（南から）

東区土層堆積状況（北東から）

西区遺物出土状況（北西から）

西区作業風景（南から）

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

芥見町屋遺跡

―芥見野村水源地建設事業に伴う緊急発掘調査―

平成17年10月

発行　岐阜市上川手770番地
(財)岐阜市教育文化振興事業団